



Title	近代日本の靴下繕い : 20世紀前半の新聞記事を中心とした分析
Author(s)	はしもと, さゆり
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 67-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代日本の靴下繕い

— 20 世紀前半の新聞記事を中心とした分析

はしもとさゆり

キーワード

靴下繕い, ダーニング, 戦時生活, プロパガンダ, 更生
Sock mending, Darning, Wartime life, Propaganda,
Upcycling-Downcycling

1. はじめに
2. 衣料の科学化とスフ靴下
3. 衣料の切符制と靴下繕いの盛り上がり
4. プロパガンダ「間に合わせ運動」と靴下繕い
5. おわりに

1. はじめに

1-1. 本研究の問題意識

本稿は 20 世紀前半の新聞記事を中心資料として、靴下繕いに関する記述を精査することで、誰がどんな理由でどんな靴下をどのようにして繕ってきたのか、それがいかなる社会的意味を持っていたのかを明らかにすることを目的とする。

近代日本における衣服の研究は、これまで主に洋服の普及過程や繊維産業の発展といった大きな枠組みの中で論じられてきた。一方、日常の生活に根ざした衣類の手入れや修繕の営みは小さく周縁的な事象とみなされ、十分に検討されていない。大量生産の仕組みが整う以前、人びとは限られた衣服を繰り返し着用し、手入れや修繕を通じてその寿命を延ばすことで生活を成り立たせていた。このような実践は資源の不足する戦時生活においても特に重要であったにもかかわらず、既存研究でそれらは断片的に扱われるのみである。

繕いや修理、ケアをめぐる研究は近年、文化人類学や科学技術論、ジェンダー研究などの観点から再評価が進みつつある。特に「ケア労働」や「家庭内における不可視された作業」に注目する動きは、本稿の問題意識と接続するものである。2010 年代以降、ダーニングやあえて目立たせる繕いの技法が国内外で人気を集めており靴下はその中心的な題材となっているが、それらはサステナビリティや大量消費批判の文脈のなかでも実践されている¹。こうし

本稿は、第 256 回例会（2025 年 2 月 8 日、オンライン）での発表にもとづく。

た国際的動向やジェンダー研究の蓄積を踏まえつつ、本稿では靴下繕いという行為を入口に、近代日本の衣生活の持続性やジェンダー役割のあり方の一端を再考することを試みる。

1-2. 先行研究

戦時の衣生活についての研究では、井上雅人が国民服ともんぺの登場と普及の経過を明らかにし、それらが戦後の衣生活や日本人の身体にもたらした影響を明らかにした²。戦時の女性の針仕事については、山崎明子が兵士に贈られる慰問人形を取り上げ、戦時においても女性たちには手芸をすることが推奨され、手作りに「兵士を思い、慰める」という意味が付与されたことを指摘した³。また靴下の研究では、これまで素材や生産技術、産業の分析に重点が置かれてきており、その繕いについては、民俗学の研究の中でごく僅かに言及される⁴に留まる。いずれの先行研究においても中心となるのは、何かが生み出され、広がってゆく光景の観察や分析であり、既に有るものに対する修繕や手当てについては見落とされてきた。靴下繕いが極めてドメスティックな営為であることもその理由として推察できよう。

1-3. 調査対象と社会背景

1-3-1. 近代日本と靴下繕い

靴下とは、一般的に編物によってできた爪先から脚部をおおう被服のことで、靴と足との摩擦の緩衝、脚の保護、防寒、脚線の美的表現などがその機能とされている⁵。日本においては南蛮貿易の時代に伝来したというのが定説で、江戸時代には下級武士が内職として手編みで生産していたとされる。明治時代になると洋風化の中で、まず軍隊の中で靴と靴下の着用が必要となり、1871年軍靴工場などを経営する実業家の西村勝三⁶が東京、築地に工場を設置し、輸入した数台の手回しの靴下編機で生産を始めたのが、日本の靴下工業の始まりとされている。西村は1877年には東京、上野で開催された第一回内国勸業博覧会に靴下、肌着など40点を出展して授賞するまでになり、日本各地に靴下の製造が広まる。「メリヤスは武器である」といわれ、明治維新以後の混乱した国内において、台湾出兵や佐賀の乱などの戦争が起こる度、靴下は軍需品としてシャツ、手袋などと並んで需要を伸ばした⁷。

このように靴下の着用は軍人から始まり、革靴と共に天皇や役人、教員、そして郵便配達夫や警察官、鉄道員など洋服が制服として定められた職業人、会社勤めの男性、学生などに広がり普及してゆくこととなる(図1)⁸。また大正時代にはゴム靴が登場したこ



図1 (広告) 大谷商店 ナショナル靴下 1918-06-13

と⁹、子供の洋装化が進んだこと¹⁰と合わせて、児童にもその使用が拡大した。

先行研究では、洋服の時代になって大変だったのは靴下の繕いだったという指摘が見られ「靴下継ぎは母親や女中の、日課のような夜なべ仕事になった」とされている¹¹。1922年の新聞には「靴下節約のお手本」という記事が登場し通信省局長の「役所へ来るとスグ恐いもののように靴をぬぎ靴下をぬいで丁寧に仕舞い込んで素足にヒヤ飯草履をヒッ掛けて長い廊下をバタバタ」という様子を「アレで消費節約の手本を示しているつもりだから堪らない」という給仕たちの声と共に紹介している¹²。また「戦後強くなったのは靴下と女」というフレーズが流行した通り¹³、それ以前の靴下は「弱い」ものであり、大事に履くことや穴が空いても捨てないこと、こまめに繕うことが当然視されたことがわかる¹⁴。

1-3-2. 調査資料について

このように日本で靴下が普及、定着する明治時代から現代までを通して検証できる資料として新聞を選定し、過去150年に渡る「靴下繕い」に関する記事の予備調査を行った結果、それらが20世紀前半に集中して掲載されていることがわかった。同時期は婦人雑誌や教科書などでも同様に靴下繕いに関する記述が登場する¹⁵が、本稿の中心資料に新聞を選定した理由は、上述のほかに幅広い読者層を有している点があげられる。また朝日新聞は、当時最大の発行部数を誇る新聞であった¹⁶。

本調査では1901年から1950年の朝日新聞紙面において、手入れや再利用を含む靴下繕いに関する記事の確認を行った。その方法は、まず同期間の「靴下」「くつ下」「ソックス」に関する記事を調査（全527件）、次にそれらをひと記事ごとに確認しながら靴下繕いに関するものを抜粋した結果、全部で54件確認された。そのうちの94パーセント（51/54件）が十五年戦争期に集中し、さらにそのうち40パーセント（20/51件）が太平洋戦争開始後、1941年12月から43年12月の僅か2年間に掲載されていることが明らかとなった（表1）。

1-3-3. 戦時下の繊維供給

1937年に日中戦争が勃発すると、戦意高揚を目指し国民を強化、戦争協力に向けた体制づくり「国民精神総動員運動」が提唱され、消費抑制や廃物利用、代用品、金属類の献納などがはじまる。同年10月に結成された国民精神総動員中央連盟は「国民精神総動員資料」を発行。その第6輯は「無駄なく使へ棄てるな廃品」と題された冊子となっており、第一次世界大戦時にイギリスが製造した軍用靴下が4年間で1億6400万足を超えたことなどを例に、軍の需要は平時に比べて膨大になることを伝えている。そして綿花や羊毛は重要な軍需資源であるにも関わらず輸入に頼っているという状況を伝え、資源の愛護が銃後の尽忠報国であ

表1 『朝日新聞』における「靴下繕い」関連記事，筆者作成

	発行日	掲載ページ	見出し		発行日	掲載ページ	見出し
1	1908年3月18日	東京朝刊, p.7	(広告) 靴下つくり器	27	1941年1月22日	東京朝刊, p.4	古靴下でハンドバッグ
2	1923年5月31日	東京朝刊, p.6	絹の靴下の洗濯 主婦の心得	28	1941年1月23日	東京朝刊, p.4	果物籠と人形 再生古靴下
3	1929年10月12日	東京朝刊, p.1	女の靴下 (緊縮漫画 こゝに無駄あり 一平)	29	1941年1月28日	東京朝刊, p.4	古靴下の再生 胴着と袖口
4	1932年4月26日	東京朝刊, p.7	靴下の利用	30	1941年2月8日	東京朝刊, p.4	靴下どうして永もちさせるか
5	1932年10月4日	東京朝刊, p.8	よまないとそんをする 家庭科学読本 絹の靴下のはき方	31	1941年3月4日	東京朝刊, p.4	便利な替え底靴下 どんな寸法でも自由自在
6	1933年6月26日	東京朝刊, p.5	よまないとそんをする 毛の靴下長持ち法	32	1941年3月5日	東京朝刊, p.4	鯨でながもち
7	1933年7月24日	東京朝刊, p.9	よまないとそんをする 靴下を手いれの時	33	1941年4月3日	東京朝刊, p.4	洗濯しても大丈夫 木綿以上に強いスフ 商工省繊維工業試験所で成功 主婦への福音
8	1935年2月23日	東京朝刊, p.11	穿きふるした靴下を活用 散々繕って穿いた後でもこれだけ役に立つ	34	1942年2月3日	東京朝刊, p.4	靴下の長持ち法
9	1935年5月31日	東京朝刊, p.5	よまないとそんをする 新しい絹靴下	35	1942年3月3日	東京朝刊, p.4	婦人靴下 上手な履き方
10	1936年9月11日	東京朝刊, p.6	婦人の靴下 穿き方常識 一足で通すは不経済	36	1942年3月4日	東京朝刊, p.4	靴下の更正法 一番穴のあく三箇所のつくろひ方
11	1936年10月8日	東京夕刊, p.4	婦人靴下の洗ひ方	37	1942年3月13日	東京朝刊, p.4	古い靴下も かうして更正
12	1937年4月9日	東京朝刊, p.6	スフ靴下の永持	38	1942年4月10日	東京朝刊, p.4	永もちさせる靴下の繕ひ方
13	1936年10月25日	東京夕刊, p.4	靴下の永持ち 早い目に洗濯して	39	1942年5月6日	東京朝刊, p.4	靴下の永持ち あらかじめ石鹼液に浸して 絹物の要領で洗ふこと
14	1937年6月9日	東京夕刊, p.4	蒸れた靴下 毎日洗う方が保ちもよい	40	1942年7月2日	東京朝刊, p.4	古い絹靴下の更正 破れ目を中心に刺繍模様
15	1938年3月12日	東京朝刊, p.6	絹の靴下 糸が切れぬために…	41	1942年7月23日	東京朝刊, p.4	はや目に繕っておく 靴下と足袋の永もち法
16	1939年1月11日	東京朝刊, p.6	絹靴下の修理	42	1942年9月9日	東京朝刊, p.4	靴下の結び 便利な補修具
17	1939年6月16日	東京朝刊, p.6	絹靴下のほつれ止め	43	1942年11月26日	東京夕刊, p.1	〔鉄帯〕 絹靴下
18	1939年12月19日	東京朝刊, p.6	弱い靴下の悩みを解決 洒落た“實用機”の作り方 愛用者中田虎一氏に聴く	44	1943年1月19日	東京朝刊, p.4	靴下年に五足 大倉經子氏
19	1940年2月8日	東京朝刊, p.5	スフの苦情 ― 子供の靴下がこの通り ― 役に立たぬ代用品	45	1943年1月23日	東京夕刊, p.2	衣料間に合わせ一家 古い物を生かし切符を返上
20	1940年2月27日	東京朝刊, p.5	絹靴下 強くするには	46	1943年2月6日	東京朝刊, p.4	〔わが家の間に合はせ〕 靴下更正へ 紅茶で染色
21	1940年3月9日	東京朝刊, p.5	五倍は保つ運動靴 便利なスフ強化塗布剤 スフの補強工作 (2)	47	1943年2月26日	東京朝刊, p.4	〔わが家の間に合はせ〕 靴下のかゝと かうして修理
22	1940年3月11日	東京朝刊, p.4	容易にすれ切れぬ たゞ塗ればよい 摩擦強化剤 スフの補強工作 (3)	48	1943年3月11日	東京朝刊, p.4	〔わが家の間に合はせ〕 筒型の靴下 年に三足で十分です
23	1940年5月21日	東京朝刊, p.5	戦時生活心得集 弱い足袋と靴下 正しい洗濯法が先ず大切	49	1943年3月23日	東京朝刊, p.4	〔わが家の間に合はせ〕 ボロ靴下や残り布も更正
24	1940年7月23日	東京朝刊, p.5	わが家の戦時體制 統制した古靴下 行李の底から取り出して	50	1943年6月5日	東京朝刊, p.4	〔戦時生活〕 靴下カバー 古布を使って
25	1941年1月20日	東京朝刊, p.4	生まれかはつた 古靴下 ビックリするほどの作品集 実物教育	51	1943年9月7日	東京夕刊, p.2	着古しも目で更正 繁昌する百貨店の「更正承り所」
26	1941年1月21日	東京朝刊, p.4	古靴下で防寒用室内履き	52	1943年9月9日	東京夕刊, p.1	闘ひ抜く自給戦 ニューギニア第一線勇士もこの苦勞 靴下を漁網に更正
				53	1943年12月4日	東京朝刊, p.4	〔保温の工夫〕 代用靴下づくり 裾廻しの衤 (えり) 分で一足出来る
				54	1944年9月1日	東京朝刊, p.2	針と糸を

ると呼びかけている¹⁷。こうした動きについて石原武政の先行研究では、政府は物資を長期的に維持することの困難性を予想しており、国民に資源の消費節約を訴える必要があったと指摘する¹⁸。特に被服問題は重視され、製造から配給、消費と広範囲な制約が事業者と消費者の両方に課された¹⁹。綿花や羊毛の輸入は制限ないし禁止され、その代用としてスフ（ステープル・ファイバー）を混用することが規定されるが²⁰、翌38年の4月には「国家総動員法」が制定され政府の権限が強化、6月には綿花の民間利用が禁止され、純スフの製品へと切り替えられてゆく。

靴下に関しては、1939年10月「繊維製品製造規則」が施行され、製造、譲渡に検査が必要となり、「番手、密度、巾、長さ」などの標準が定められ、合格品には印章または証票を付すことが義務付けられた²¹。この頃の靴下製造について、内外編物株式会社の技術者、坂田信正は、1940年10月から「メリヤス業者はすべて製造、販売ともに統制会社の支配下で経営を行わねばならず、勝手に原糸を購入して製造、販売ができなくなった」とし、靴下を含むメリヤス製品に対して全国公定価格が決定され「業者はがんじがらめの状態におちこんだ」と回顧している²²。靴下メーカーの廃業が相次ぐ中、配給の糸で民間の規格品を製造しながら陸軍の靴下を手がけなんとか経営を支えるケースもあったという。

以下、本稿では、近代日本でもっとも靴下繕いが盛んであった十五年戦争期の様子を三つの時期と事例に沿ってみてゆく。誰がどんな理由でどんな靴下をどのようにして繕ってきたのか、主に家庭欄を中心とした新聞誌面を手がかりとして明らかにしたい。

2. 衣料の科学化とスフ靴下

貴重な繊維資源である靴下に対して、当初は日々の手入れによる「長持ちの模索」が行われた。1937年春の「靴下は多くの場合、垢しみて臭味がついて来ると穴があくので、そうならないうちに早めに洗濯するとずっと経済的です」「汗ばんで靴下に曇りがつくと余計いたみますから、毎日別のと交代に履けば更によく、左右とりかえて履くのも永持ちの一方法です」²³「靴下の保ちからいっても毎日洗濯する事の必要はすでに常識」²⁴などの記事では、汚れない状態が破れにくいとされ、洗濯方法が示される。ここでは、毎日別の靴下を履くことや靴下を洗濯することなど、現代と同じ規範の言及があることもわかる。

同年7月7日の盧溝橋事件に端を発した日中戦争がはじまると、前述の通り商工省は毛製品、綿製品にスフの混用使用を定め、10月からは純毛靴下、12月から純綿靴下が製造禁止になる²⁵。代わりに登場したのがスフ靴下であったが、スフは木材パルプを原料とした短繊維の合成繊維で、水に濡れると破れるという性質を持っていたため、弱い、破れやすいといった苦情が相次ぐ。例えば1940年2月8日の「スフの苦情——子供の靴下がこの通り——役

に立たぬ代用品」という記事²⁶では、「運動会運動会当日一日履いたきりでこんなに切れてしまいました」という靴下の写真を掲載すると共に「スフ靴下への抗議はその他いろいろあります」として複人数からの苦情を紹介している。スフでできた製品はさまざま流通したが、「最も大きな問題となったのは男、女学生と小学生の靴下」であり、それらは「主婦の悩み」と表現された²⁷。靴下の手入れや繕い、管理は主婦の仕事であったからだ。

1940年の3月には「スフの補強工作」という全3回の特集が組まれ²⁸、商工省繊維工業試験所での試験中の様子や摩擦強化剤の使用テストの様子が写真入りで紹介される。摩擦強化剤とは、ただ塗るだけでスフを丈夫にできるとされ、「この薬を塗った右のスフ靴下は子供が朝から晩まで学校でも家庭でも八日間履き通したのですが、まだなんともなっていません。塗らない方の左の靴下は使用後三日目で底に大きな穴が二つも空いています」(図2)と写真付きで紹介されている。



図2 スフの補強工作 (3)
1940-03-11

また、1940年5月の「戦時生活心得集 弱い足袋と靴下」という記事では日本女子大学教授の上田柳子が「スフ靴下の補強法位心得て置かなければ此時代の主婦とは云へません」「靴下は毎日洗濯する事。汚れが染み込むと破れ易くなります」と述べ、予め爪先や踵に補強の糸を刺すことやすすぎ時に植物油を少々垂らす補強法などを紹介する²⁹。上田は大日本婦人会衣服部委員や国民生活科学化協会専門委員などを務め、戦時の家政学者として重用されていた人物だ³⁰。戦時衣服の先行研究において井上雅人はこのようなスフの取り扱いの難しさによって「衣服の科学化」が進展したこと、繊維の消費が重要な関心となったことを指摘する³¹。着心地よりも強度に主眼が置かれる靴下という存在は、手入れによって消耗のスピードを管理することのできる象徴的なアイテムとなり多くの場面で言及される。家族の靴下は主婦の適切な洗濯と手入れにより管理、確保されることが当然視されたのである。

3. 衣料の切符制と靴下繕いの盛り上がり

1942年、太平洋戦争の開戦から程なくして衣料切符制が始まる。靴下は足袋や手拭いと並んで品目と数量を限定する「制限小切符」に定められた6品目に該当し、年6足という制限が設けられ³²、児童や女学生の靴下は悩みの種となる³³。2月1日の「きょうから衣料切符制」という見出しの記事では、婦人時局研究会³⁴の市川房枝や竹内茂代、川崎なつらが商工省繊維局綿業課事務官の近藤止文³⁵を囲んで行った「衣料に関する懇談会」での話として「勝ち抜くために今こそ戦時下に最も適した衣生活の計画をたてなくてはならない、繕い物の用意



図3 靴下の更生法, 1942-03-04

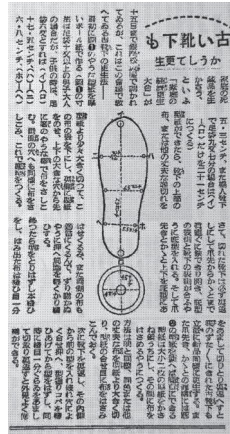


図4 古い靴下もかうして更生, 1942-03-13

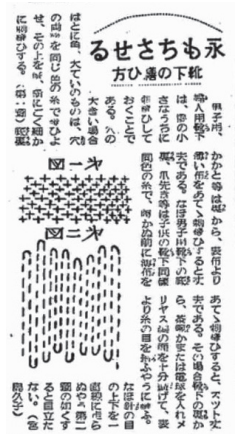


図5 永もちさせる靴下の繕ひ方, 1942-04-10

はよいか、手持ちの古物は生かして賄え」という銃後の婦人の心構えが示される。記事には「靴下や足袋も配給で十分」という小見出しが並び、「靴下の六足は少ないと嘆く婦人もあるようだが」それも今までより少なくないとし、切符を家庭内で楽しく融通し合うことやあとで出回る良品を買うことで、「乏しい繊維の資源で国内をはじめ東亜共栄圏の衣生活をも賄っていこう」と協力要請する近藤の説明が紹介された³⁶。

翌月以降の家庭面では靴下の更生法、修繕法が続けざまに紹介される。3月4日の記事では「靴下の一番穴のあくところは爪先、底の前方、踵で、この三箇所はできるだけ繕っておかなくてはならない」とし、その上でどうしてもこれ以上は繕えないようになっても捨てないで「更生させる」方法が紹介される(図3)。別の悪くなった靴下の痛んでいない部分の布地から挿絵に示される型のとおり裁断し、爪先と踵に縫い付けることを指南。靴下というのは爪先や踵の部分は模様が違うものが多いので、こうした更生品で「色や布地が違っていても決して体裁が悪くない」と締め括られる³⁷。3月13日の記事では、銀座松坂屋で開かれている「家庭の経済更生大会」で教えられているという、底の切れた古靴下の更生法と爪先と踵の「外見よい」修繕方法が紹介される(図4)³⁸。4月10日の記事は「永もちさせる靴下の繕ひ方」という見出しで、より詳細な靴下繕ひの方法が示される(図5)。冒頭では「傷の小さなうちに修繕しておくこと」の必要性を説きながらも、穴が空いてしまった場合は「穴の両端を同じ色の糸で縫いよせ、その上を縦、横にごく細かに刺縫いする」ことや、補修として「底裏かかと等は裏から、裏布より薄い布をあてて刺縫いする」こと、新品の靴下を下ろす際は底部や爪先を「同色の糸で、履かぬ前に薄布をあてて刺縫いする」ことなど、場面に応じた補修と補強の方法が示される。更に「靴下の裏から、茶碗かまたは電球を入れメリヤス編の面を十分広げて、裏より糸の目を拾うように縫う」という、家庭にある物を使った

工夫が示されるほか、「針の目の上下を一直線に走らぬよう第二図の如くすると目立たない」といった極細かなテクニックにまで言及している。ここでも同色の糸を使うことや、目立たなく仕上げることへの記述が見られた。

靴下の購入は年6足と制限されるがその対応策は繕い方の研究とされ³⁹、作ることではない。「まずいたんで来たら、すぐに靴下は靴下、足袋は足袋で別々の修繕袋に入れておく」「靴下袋には靴下つぎ器と毛糸針、はさみ、安全かみそりの刃などを入れておく。こうして五分間でも時間ができた時には、すぐこの修繕袋をとり出して手当てをはじめ。外出の際もこの袋をぶら下げてゆけば電車の中の25分で靴下の1センチ大の穴のつくろいが、ていねいにしても三つできる」⁴⁰という記事からは繕い方のみならず、日常生活の中で俊敏に対応してゆく心構えが示されていたことがわかる。また同時期「靴下のほころびを繕うのに便利な補助道具」という「靴下つぎ器」が百貨店で販売されていることも確認された⁴¹。

戦時下の女性の針仕事に関する先行研究において山崎明子が明らかにしたのは、女性が手芸制作を通じて、兵士を想う主体であることを表明したことであった。針仕事は、兵士を想った労力の集積であり、その制作時間の表象でもあった。「それは単なる『制作』ではなく、既存の衣類をほどこし、節約し、再び縫い合わせるプロセスも含め、限られた物資を活かすために工夫を重ねるその時間と労力と知恵も、戦地への想いに還元されていった」と山崎は指摘する⁴²。靴下の欠乏が課題となる時局においても、家庭の女性たちに必要とされたのはそれを作る行為ではなく、古い靴下をほどこし、縫い合わせ、細かく運針してゆく繕いのプロセスであった。新聞の家庭面や百貨店の店頭で靴下繕いの指導が行われ、日常生活の中でどのように靴下繕いに俊敏に対応してゆくかの心構えが教示された。これらのことから、限られた資源を活かすために女性が針仕事によって、工夫を重ねる時間と労力、知恵を要求されたことがわかる。またいずれの場面でも「体裁が悪くない」「外見よく」「同じ色で」「目立たない」方法が強調され、このような物不足の場面においても、依然として繕われた靴下の見え方を気にする（させる）様子も伺える。

4. プロパガンダ「間に合わせ運動」と靴下繕い

1943年の年始、大政翼賛会が新調見合わせの「間に合わせ運動」を提唱しはじめる⁴³。1月19日の「間に合わせ運動／身の回りから実行へ」という見出しの記事では、「すべての物資を戦争に回すためには銃後の生活は最低限まで切り詰めねばならず、従って新調も見合わせて有る物で間に合わせていこうというのがこの運動の精神である」「燃料の節約、古着の更生、衣類の交換など、思いついた手近かなところからどしどし実行に移さなければ意味はない」という大日本婦人会本部理事長、川西實三⁴⁴の言葉を紹介し、同会では全国2000万人の会員

を動員して実践運動を開始すると伝えた。同記事後半には、上手な衣類繰り回しの実例の一つとして靴下を取り上げた箇所があるので、一部を以下に引用する。

靴下の年6足はどうしても足りないというのが通り相場のようにになっているが私の家では国民学校に通う娘の靴下は去年の二月からちょうど一年で五足しか使っていない。靴下の永持ち法の要領は新しい内に裏から当て布をするとよいのである。ボロになった靴下を犠牲にして上部の折り返しの部分はほどいて糸にとりつぎ糸にする、踵から上の比較的傷まない部分を当て布にして新しい靴下の親指の上と底と踵に初めからつぎを当ててしまう、こうすればスフ入りの学童靴下でも半年位はそのままで持つ。

この記述は「友の会」会員とされる主婦の声として紹介され⁴⁵、「要するに早い手当てが永持ちのコツである」と締め括られる。また同記事では「間に合せ」の実例募集が購読者に向けて告知された。応募規定には「長さ400字内外」、送り先は朝日新聞家庭部「戦時生活」係、紙上採用分には薄謝、と記され上手な繕い方や燃料節約などの「衣食住あらゆる方面」の体験談の募集を開始した。

この4日後の1月23日の夕刊には、その具体例のような「間に合せ一家」として、衣料切符を一点も使わなかったという兵庫県相生市のある8人家族が紹介される⁴⁶。長男、次男、三男が戦地に赴いたのち、残された家族は「私達はほんとにつつましく生活しましょう、少しでも無駄な生活があっては申し訳ない」と決心したという。「戦死して遺骨になって帰って来たら、その時にはこの切符で真っ白な絹を買って祭壇を飾ってやりましょう」と衣類は何もかも間に合せて対処しているうち、一家は思い切って全点数を商工省に返納するに至る。その具体的な節約の例として、ここでもまた靴下繕いの描写が登場する。

美代子さんの制服は十年も前に卒業した姉の善恵さんのお古である、靴下も有合せのものを学校から帰っては毎日の様に繕う、繕ってはまた履く……幼稚園に通う正君の服は長男の服の更生品、孫さん達の靴下、足袋はすべてつぎがあたっている『こんなつぎはぎを着せて、ひどい婆ちゃんですー』と笑う亀喜さんの足を見ると、男の足袋を履いているのだ

家族は息子3人の武運を祈りながら、銃後のつつましい生活を送るが、その象徴として毎日の靴下繕いの様子が描写される。それらの行為は「(切符を返納したお金で)弾丸切手を買ひ、それを貯金し、いまは子たちが遺骨となって還って来ても包むべき白布さえ返納して、無

事を祈りつつ懸命で消費を抑えて来た」と称賛され、手本として取り上げられた。

前述の実例募集は、「わが家の間に合わせ」と題したコーナーとなり、居住地と名前が明記された購読者からの投稿らしき衣食住に関する小さな工夫が相次いで紹介される。同コーナー上で、靴下に関する投稿は4件あった。

2月26日の「靴下の踵をつぐのに一片の平な布地を、そのまま当てては丸味がないので履心地も悪いので、これに適宜の丸味もつけ、しかも最小限の布地で簡単に修繕する工夫をしました」という投稿⁴⁷からは、踵の修繕に布を当てることある程度一般的であった様子や、最小限の資源（布）で簡単に修繕することが強調されている様子がわかる（図6）。3月11日の「筒型の靴下」と題した投稿⁴⁸では、「兵隊さんの靴下のような踵のない筒型のものを用ひます。これを毎日グルグル回しにはけば、何時でも同じ処が同じ場所に当たりませんから傷み方が余程違います」として軍用靴下と同じ筒型のものを用い、少しずつ回転させながら布地を傷めないように着用することを勧める。その上で「少し薄切れて来たところで同色の糸で細かく刺します。いよいよ穴があきはじめたら一応穴をふさいで置いて今度は反対に使います。即ち爪先のとじ糸を鋏で切ると蓋があきますから逆に糸で縫い縮めて爪先をつくります」という要領で上下を返して「一足を二度」履く、現代の感覚ではかなり極端ともとれる方法が提示される。そして、ここでも投稿は「靴下は一年三足で十分事足ります」と消費の数を明記して締め括られる。

戦時下プロパガンダの先行研究で大塚英志は、短編映画や模型のコンクール、軍歌などを例に、戦時下に無数の標語が作られそれが投稿によって支えられたことを指摘したが⁴⁹、ここでも同様に靴下の間に合わせを投稿することによって購読者が戦争に動員される様子がみえる。また間に合わせ一家の例や「わが家」と冠したコーナータイトルからは、戦時下に家庭での日常生活を題材することが増えたという新聞漫画における先行研究での指摘とも相関性がうかがえる⁵⁰。配給制による「年6足」というわかりやすい目標と相まって、靴下は家庭の女性が子や夫のそれを繕う、わかりやすい消費節約の例として有効に働き、誰にでもできる小さな技術によって、生活が戦時生活に書き換えられたと言えるであろう。

5. おわりに

最後に、本調査で確認された最後の記事を紹介したい。1944年9月11日の投書である。

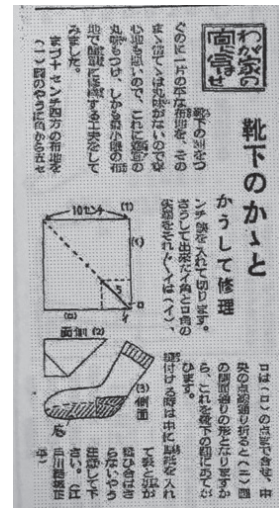


図6 わが家の間に合わせ 靴下のかかと, 1943-02-26

今、衣類を新調している場合でないことはよく承知しています。また実際に衣料切符をもっていてはなかなか買えぬ状態です。それも止むを得ないと思います。結局、衣類は修繕、更生で間に合わせていくほかに方法はありません。

ところが、針と糸の配給がないのでそれさえできずに困っておられる家庭はかなり多いと思います。贅沢は申しません。糸は木綿でも絹糸でもよろしい、また色も赤、白、黒、クリーム何色でも結構、決してえり好みはいたしません。どうか、これだけは是非円滑に配給して下さい、特別のご配慮をお願いいたします。

今のうちにちょっと繕えばまだまだ着られるシャツや靴下があたり廃品になってしまいますので敢て本欄を拝借しました次第です。⁵¹

「糸を針を」と題されたある主婦からの本文では、戦争末期になりもはや衣類の修繕や更生は当然との認識があるが、そのための糸と針すら欠乏するようになったこと、素材や色合いも構わないので配給を希望することが控えめな筆致ながら切実に語られている。この前年1943年6月、戦時衣生活簡素化実施要綱が閣議決定され、衣服は「絶対に新調しない」ことが改めて要請された。その際、政府はその代わりとして今後「補修用資材」つまり修繕用衣料、針、縫い糸などの確保をしてゆくとしていたが⁵²、それも滞っていたことが推測できる。1944年6月には衣料品の販売禁止措置が取られ⁵³、この主婦の述べる実態と通り衣料切符制も意味をなさなくなっていた。以降、靴下繕いに関する記事は一切確認できない。

これまで本稿では、近代日本において靴下繕いがかつとも脚光を浴びた十五年戦争期の様子について、誰がどんな理由でどんな靴下をどのようにして繕って（繕わされて）きたのか、それがいかなる社会的意味を持っていたのかを主に家庭欄を中心とした新聞誌面を手がかりとして読み解いてきた。本稿の終わりにあたり、何が明らかとなったのかまとめておく。

当時の天然繊維で作られた靴下は破れやすく靴下繕いは女性の当然の行為とされたが、加えて日々の手入れによる「長持ちの模索」が行われたのが日中戦争開戦前後である。毎日別の靴下を履くことや毎日靴下を洗濯することなど、現代と同じ規範が登場し、それらが紙面を通じて指南された。その後、重要な軍需資源である綿花と羊毛の消費を抑えるため代用品スフの使用が義務付けられ、更に破れやすいスフ靴下が登場する。主婦にとっての大きな悩みは、男、女学生、小学生用の靴下の管理であり、スフの取り扱いの難しさは衣服の科学化を後押しした。戦時、繊維の消費は重要な関心となるが、着心地よりも強度に主眼が置かれる靴下という存在は、手入れにより消耗のスピードを管理することのできる象徴的なアイテムとなり多くの場面で言及される。家族の靴下は主婦の適切な手入れにより管理され、確保されることが当然視されたのである。

1942年、太平洋戦争の開戦からほどなく衣料配給制が開始され、靴下が年6足に制限されると、新聞誌面には補修法に関する記事が度々登場するようになる。靴下不足に対応する銃後の婦人に必要とされたのはそれを作る行為ではなく、あくまでも古い靴下をほどこき、縫い合わせ、細かく運針してゆく繕いのプロセスであった。イラスト入りで詳細に紹介される極細かな繕いのテクニックからは工夫を重ねる時間と労力が、資源節約という本来の目的を超えて、戦時下の他の針仕事と同様に戦地への想いに昇華されていったことが伺える。また同時期、百貨店で繕いのための道具販売や指導を行う催しが開催されていたこともわかった。いずれの場面でも「体裁が悪くない」「外見よく」「同じ色で」「目立たない」方法が強調され、繕われた靴下の見え方を気にする（させる）様子も明らかとなった。

戦況が更に厳しくなると、新調見合わせの「間に合わせ運動」が大政翼賛会によって提唱され、誌面でも靴下の間に合わせの術を投稿することによって人々が戦争に動員される。靴下は、家庭の女性が子や夫のそれを繕う、わかりやすい例としても有効に機能したことがわかる。誰にでもできる小さな技術によって、生活が戦時生活に書き換えられたと言えよう。

それは女性の手による、目立たず（目立たせず）ドメスティックな営為であったため、既存の戦時研究において顧みられることはなかった。運針の技術や工夫、労力の集積によって繊維資源が持続性を持ち得ることはかくも明白であったに関わらず、戦後の社会においては新しく作ることやその伝播のみが関心事であり続け、繕いは長く衣生活や手仕事に関する研究からも見落とされてきた。しかしこれまで見てきた通り、女性が家族のために時間と労力を重ねる靴下繕いは、戦争協力の装置として大きな存在感を持ち、メディアを通してしきりに喧伝されたことが明らかとなった。1945年夏の終戦後も物資不足は続き衣料配給制も継続したにも関わらず、同様の記事が全く見当たらなくなることはその何よりの証拠であろう。

註

- 1 鈴木和歌奈、伊藤洋志「環境危機へのオルタナティブな世辞——ナリワイをつくる」日本文化人類学会『文化人類学』2025年90巻1号、p.23, 24 鈴木は見えるように跡を残して衣服を修繕するビジブル・メンディングの実践を援用した「エコロジカルな繕い」という概念により、壊れてしまった人間や環境、経済を修繕していく様を捉えることを試みている。
- 2 井上雅人『日本人と洋服 国民服というモード』廣済堂出版、2001年
- 3 山崎明子『「ものづくり」のジェンダー格差——フェミニナイズされた手仕事の言説をめぐる』人文書院、2023年
- 4 大丸弘、高橋晴子『日本人のすがたと暮らし』三元社、2016年
- 5 服装文化協会編纂『増補版 服装大百科事典 上巻』服装文化協会、1969年、p.255
- 6 稲川實、山本芳美「靴づくりの文化史——日本の靴と職人——」現代書館、2011年、p50-54. 西村勝三の製靴事業はのちに日本製靴（現、リーガルコーポレーション）となる。
- 7 坂田信正『靴下の歴史』内外編物株式会社、1971年、p.53-63, p.67-78, p.96-102

- 8 増田美子編『日本服飾史』東京堂出版, 2013 年, p.145
- 9 市田京子「はきもの ― 開放性から閉塞性へ」日本生活学会編『衣と風俗の一〇〇年』ドメス出版, 2003 年, p.156
- 10 増田美子編前掲, p.157 なお, 女性の洋装が一般化するのは戦後である。
- 11 大丸弘, 高橋晴子前掲, p.52
- 12 朝日新聞, 東京版, 1922-08-24, 朝刊, p.4
- 13 田中美津『新版いのちの女たちへとり乱しウーマン・リブ論』現代書館, 2016 年, p.19
- 14 川崎鈴子「衣服の収納」日本生活学会前著, p.178 戦後強くなったものの代表にあげられた靴下に対して, 「強くなって穴当て作業は必要なくなったが, 穴があけば捨てられるようになった」とも指摘する。
- 15 「毛糸の再生法と編物の洗ひ方染め方繕ひ方」『婦人倶楽部十月号』(附録), 講談社, 1938 年や文部省『初等科裁縫。下』文部省, 1943 年, p.39-41 近代教科書デジタルアーカイブ <https://nierlib.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG00016699/> (参照 2025-08-20) 本書の最終節「七たび・靴下のつくろひ」の中で靴下繕いが図解される。「底・爪先など」の穴の空いた靴下の繕いは現代のダーニングと類似の技法が手本として示される。
- 16 朝日新聞百年史編修委員会『朝日新聞社史 資料編』朝日新聞社, 1995 年, 読売新聞社『読売新聞百二十年史』読売新聞社, 1994 年, 伊藤正徳『近代日本新聞史』書肆心水, 2023 年
- 17 内閣ほか編『無駄なく使へ棄てるな廃品 (国民精神総動員資料; 第 6 輯)』国民精神総動員中央聯盟, 1938 年
- 18 石原武政「第二次大戦下の物資統制 (上)」大阪市立大学経営学会, 2021 年, p.11
- 19 田中陽子「1937 年から 1945 年までの戦時下における被服統制と供給事情」日本家庭科教育学会誌 52 (3), 2009 年, p.203-211
- 20 官報 3296 号, 1937 年 12 月 27 日, p.853
- 21 田中陽子前著, 官報 3801 号, 1939 年 9 月 15 日, p.111, 113-118, 官報 4189 号, 4189 号, 1940 年 12 月 21 日, p.767-768, 官報 4138 号, 1940 年 10 月 22 日, p.714
- 22 坂田信正『靴下の歴史』内外編物株式会社, 1981 年, p.194
- 23 朝日新聞, 1937-04-09, 東京夕刊, p.7
- 24 朝日新聞, 1937-06-09, 東京夕刊, p.4
- 25 商工行政史刊行会編『商工行政史 下巻』商工行政史刊行会, 1955 年, p.81 ただし翌年 1938 年 6 月には国内向け綿製品の製造は打ち切られることとなり, 純スフ製品が製造されることになる。
- 26 朝日新聞, 1940-02-08, 東京朝刊, p.5
- 27 朝日新聞, 1940-02-04, 東京夕刊, p.2
- 28 朝日新聞, 1940-03-08, p.5, 1940-03-9, p.5, 1940-03-11, p.4 いずれも東京朝刊
- 29 朝日新聞, 1940-05-21, 東京朝刊, p.5
- 30 上田柳子『新しい衣服生活』皇国青年教育協会, 1942 年 同書においても 2 ページ超にわたって「物資愛護の一つの例」として靴下繕いへの言及がある。それによると「靴下の用い方について注意すべき点」は以下の通り。(1)洗濯を手まめにすること, (2)破損箇所は前もって手まめに繕っておくこと, (3)外出用, 普段用を区別してはくこと, (4)靴下カバーをつくっておいて家居の時には使用すること (p.314-316)。また服飾デザイナーの田中千代も同年, 大政翼賛会文化部編『新生活と服飾』紙面上の座談会において, 「同じ会社の同じスフの靴下で実験しますと, 一日で

- やぶれた人、十五日も切れなかった人という差があり、五六日ぐらいでやぶれた人が一番多く」などの言及をしている (p.198)。
- 31 井上雅人前掲, p.213-215 商工省の繊維工業試験所長の吉岡直富や日東紡績株式会社の調査係、小林正らの当時の言説を取り上げ、彼らにとっての「衣服の着用とはあくまでも繊維の消費であり、効率的な消費こそが彼らの求めるものであった」と分析した。
- 32 石原武政前掲「第二次大戦下の物資統制 (下)」, p.87
- 33 朝日新聞, 1943-01-20, 東京朝刊, p.4, 朝日新聞, 1943-01-31, 東京朝刊, p.4
- 34 齊藤涼子「参政権をめぐる女性と政治」国立公文書館 アジア歴史資料センター <https://www.jacar.go.jp/universalsuffrage/column/detail/?key=4> (参照 2025-06-09) 1939 年 2 月設立。
- 35 近藤止文は 1942 年の雑誌『家庭科学 第 72 号』においても配給制と靴下について言及している。「衣料消費について先日聞いた話であるが、靴下を買う時、三足同色同質のものを求めると共通に使用が出来るし、又修繕にも便利だという事である。衣類の寿命を保つ為に用い方、洗濯、整理等に種々あるであろうが、此の際一層の衣生活についての計画性と、科学性を望んで止まない次第である」、『日本婦人問題資料集成』第 2 巻, ドメス出版, 1977.8. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/12142345> (参照 2025-06-09)
- 36 朝日新聞, 1942-02-01, 東京朝刊, p.4
- 37 朝日新聞, 1942-03-04, 東京朝刊, p.4
- 38 朝日新聞, 1942-03-13, 東京朝刊, p.4
- 39 朝日新聞, 1942-07-23, 東京朝刊, p.4
- 40 朝日新聞, 同上
- 41 朝日新聞, 1942-09-09, 東京朝刊, p.4
- 42 山崎明子前掲, p.117 118
- 43 朝日新聞, 1943-01-19, 東京朝刊, p.4
- 44 氏名と肩書きは以下も参照。『日本婦人』1 (3), 大日本婦人會, 1943-01. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1578583> (参照 2025-06-11)
- 45 ここで登場する「友の会」とは、羽仁もと子が創刊した雑誌『婦人之友』の愛読者団体であると推測される。戦後、同名主婦からの投稿が同誌上で確認できる。
- 46 朝日新聞, 1943-01-23, 東京夕刊, p.2
- 47 朝日新聞, 1943-02-26, 東京朝刊, p.4
- 48 朝日新聞, 1943-03-11, 東京朝刊, p.4
- 49 大塚英志「戦時下のメディアミックス —『翼賛一家』と隣組」大塚英志編『動員のメディアミックス〈創作する大衆〉の戦時下・戦後』思文閣出版, 2017 年, P.41
- 50 除園『日本における新聞連載子ども漫画の戦前史』日本僑報社, 2013 年, p.140
- 51 朝日新聞, 1944-09-01, 東京朝刊, p.2
- 52 「閣議等関係文書・閣議決定・昭和 18 年」大臣官房総務課外, 昭和 17 年 11 月 01 日-昭和 19 年 02 月 03 日, 国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/file/3121328.html> (参照 2025-06-16)
- 53 石原武政前掲「第二次大戦下の物資統制 (下)」, p.93

Sock mending in modern Japan:

An analysis of newspaper articles from the first half of the 20th century

HASHIMOTO, Sayuri

This study analyzes sock mending in modern Japan, which reached its peak during the Fifteen Years' War, focusing on newspaper articles from the first half of the twentieth century and examining three periods and representative cases. In 1937, when the Second Sino-Japanese War began and it became necessary to secure military resources such as cotton and wool, synthetic fiber socks, which were prone to tearing, appeared on the market. Articles from this period reveal that it was taken for granted that family socks were managed through meticulous washing and reinforcement by housewives. In 1942, with the introduction of the clothing rationing system, socks were limited to six pairs per year. Faced with shortages, women responded not by making new ones but by unraveling, sewing, and carefully stitching old socks back together. In 1943, during the propaganda Maniawase ("Make Do") campaign, newspaper readers submitted tips for repairing socks, showing how small techniques were mobilized to transform everyday life into wartime living. In this way, the time and effort women devoted to mending their family's socks functioned as both a form of domestic labor and a means of wartime cooperation—one that was actively disseminated and celebrated through the media.